

● シリーズ 私の見た日本 Vol.220

庭園で見る日本の建築と文化

尹 道現 (ユンドヒョン)



韓国大邱市生まれ。2024年
神戸大学大学院工学研究科
建築専攻博士前期課程修了、
遠藤秀平建築研究所入社

韓国と日本は地理的に近く、仏教と儒教を共有し、同じ漢字文化圏を持つ国である。似たような文化圏に属しているが、それぞれ固有の明確な文化的差異を持っている。

建築はそれぞれの国の文化を代表する。多くの人が建築は「建物を建てる行為」だと知っている。しかしもっと正確に言えば「空間を扱う行為」だと言える。つまり、建物だけでなく、都市など人間が生活するすべての空間を建築の領域と言える。

韓国では庭を「庭苑」と表記していたが、現在は日本と同様に、主に「庭園」としている。漢字を解いてみると、「苑」は国の庭で、塀で境界を作った庭を意味し、「園」は山の庭で、家の前後または左右に作った庭、あるいは大きな家に作った庭を意味する。微妙なニュアンスの違いだが、漢字表記から韓国と日本の庭園の微妙な違いがわかるだろう。

韓国の庭園は自然景観に境界を作る概念であるのに対して、日本の庭園は家の内部に自然を作る「曖昧さ」の概念である。例えば建物と自然の境界となる塀が、韓国は非常に低いという点にも韓国の建築的特徴が現れている。これは、目の高さから見たとき、人間の領域と自然の領域が差がないことを表現するためである。自然をそのまま庭に取り込み、庭が拡張されて自然になっているの

だと言える。

一方、日本の庭園は韓国と中国の庭園の特徴も少しずつ持っているが、全く異なる形態である。規模や雰囲気は韓国の庭園と似ており、構成要素が自然の一部を移すのではなく全体を縮小するという概念は中国と似ている。しかし日本庭園が韓国や中国の庭園とは全く異なる形で現れる理由は、日本庭園の核心概念が「比喩」だからだ。自然をそのまま持ってきて鑑賞するのではなく、精巧に加工・編集された自然を通して哲学的な概念やテーマを表現しようとしており、この特性が日本の庭園と伝統的な建築が調和し、思索と観想の空間となった。このような抽象的な技法が極端に現れた日本庭園の形式が「枯山水」と言える。鬱蒼とした木々や色とりどりの花、あるいは池もなく、ただひたすら砕いた石と白い砂だけで水面のような雰囲気を演出している。単純に見ると、白い砂利の上に石が配置されているだけのように見えるが、実はこれが大地と空、海、そして山と木、降臨を表現しているのである。

日本の庭園を見ると、日本の自然観を知ることができる。日本の庭園は、自然を手の中に取り込もうとする傾向が比較的強く、自然を空間に引き込もうとする努力が感じられる。例えば、住宅に小さな庭を作り、その庭を外

部環境と同じように「自分だけの自然」として演出し、動作が行われる空間ではなく、観賞のための空間として認識する。また、内部空間に自然をフレーム化し、自然を空間に介入させようとする試みも見られる。日本の庭園では、自然そのものを感じることはないと思う。自分の好みの自然を演出し、それを美と信じる行為ではないだろうか。だからこそ、日本庭園の中で主体は人間であり、客体は自然である。自然は存在するが、この世界が存在するはずの理想郷であり、好みによって編集された対象であると考えられる。日本の庭園は、自然を縮小しながらも、自然の中のエッセンスを取り込むことを目的とする。そうしてもたらされた自然を楽しむ。だから日本の庭園は韓国の庭園とは大きく異なるのだ。庭を作るとき、庭を作る周辺の自然を考慮することだけでは十分ではない。庭の主人が追求する趣向を反映し、その趣向に応じた様々な庭園と名勝持続自然を参考にする。庭を作った主人が自分の求める自然を企画し、具現化するのが日本の庭園である。個人の趣向を自然に盛り込む試みは韓国では見られないが、日本では慣れている。このような美意識は、当然、個々人の好みを認める雰囲気につながる。生まれてから見て経験する美意識が、好みを編集して庭に現れるからだ。つまり、



日本建築と自然



自然のフレーム化



左上/日本家屋の庭園 右上/龍安寺の枯山水 左下/都市の庭① 清水寺 中下/都市の庭② 鴨川 右下/身体で感じられる日本の庭園

庭園は自然環境を再現した自然公園でも植物園でもなく、自然から何らかの美的要素を抽出したものである。むしろ、自然から何らかの美的要素を抽出した芸術作品として解釈される。そのため、日本の庭園を作る過程は、外向的というよりは内向的な傾向を示す。このように、自然を完全にコピーしない行為は、庭が自然を越えることができないことを認識していると思う。庭を作る際に無関係な要素を排除させ、これは自然を編集の姿勢で見ているとも言える。

日本特有の閉鎖性、繊細さ、縮小志向が庭園にも表れていると言える。借景は、遠くの景色を絵画的な方法で庭に取り入れる技法である。借景庭園は、他のどの庭園よりも自然を縮小して描写することに集中している。このような借景庭園の概念は、都市の風景にも反映されている。京都はほとんどが平地であり、盆地である。京都の河原町、嵐山、東山のような地域では、少し顔を上げると遠くに比叡山が見える。清水寺では、京都の果てが見えるほど低い建物が多い。このように、

京都は周囲の自然景観を損なわない景観デザインで他者性を持っていると言える。

京都には小さな庭園がたくさんあるのも興味深いところだ。すでに優れた自然、涼しい鴨川があるにもかかわらず、自分の家やお寺の中に縮小した自然を作る。また、その長縁は好みに合わせて造られた庭園である。自然を縮小して描写する行為は、それだけで京都における日本の美意識がいかに向内的であるかを知ることができる。

こうした周囲の景観がよく見えるように、やや人工的で過度に人工的な面もあるが、日本の庭園こそ日本の繊細さがよく溶け込んでいる空間と言える。したがって、庭の設計と美意識の中には、自然を観察することはもちろん、庭を通して周囲の環境との生命力と自分との調和を図ろうとする試みもある。しかし、日本の建築や企画の中では、このような美意識を現代的に再解釈して使用している。意図しているというよりは、彼らが常に見た仕上がり「編集」していたからである。日本が新しいものを発明するのではなく、既存の概念を

改良して新たな概念を生まれ変わらせるのは、このような特徴が反映されているからだと思う。例えば、西洋のミニマリズムがシンプルさを追求し、不要なものを取り除き、物事の本質だけを残すという概念であるならば、日本は形式的には似ているように見えるが、「空」によって何も無いことを意識し、意図を探して編集する側面に近い。このように、日本人にとって、庭で見る編集された自然は「空間」を認識する基準と言える。多くの人々は京都の庭園で本質を重視し、席に座り、庭園に没頭した。

外国人である私にとって日本の庭園は異文化かもしれないが、日本人にとってはルーツを探求することではないだろうか。それは空間を飾ることやディテールに当然影響を与える。知らず知らずのうちに「編集されたもの」を五感で体得しているからだ。これが私が考える日本の庭であり、日本の庭から発見した美意識である。